

舟大垣を發し桑名に赴く

頼

山

陽

蘇水遙遙海に入つて流る

櫓声雁語郷愁を帯ぶ

独り天涯在る年暮れんと欲す

一篷の風雪濃州を下る

【作者】頼 山陽（一七八〇〜一八三三年） 名は襄（のぼる）、字は子成（しせい）、号は山陽。大坂江戸堀に生まれた。父春水は

安芸藩の儒者。七歳叔父杏坪について書を読み、十八歳江戸に遊学した。二十一歳京都に走り脱藩の罪により幽閉される。のち各地を遊歴し、天保三年九月病のため没す。年五十三。著書に「日本外史」「日本政記」「日本樂府（がふ）」等がある。

【語釈】*大 垣：岐阜県大垣市 昔は木曾川舟運（しゅううん）の要所 *桑 名：三重県の桑名市 伊勢湾に面す当時海運

の要所 *蘇 水：木曾川のこと 岐蘇川（きそがわ）とも書く *一 篷：一そこの船 篷（ほう）はとま *濃 州：美濃（みの）の国（今の岐阜県）

【通釈】木曾川の流ればはるかに遠く海に注いでいる。この川を自分は今舟で下っているのであるが、時折り櫓の音や頭上を渡る

雁の声を聞くと故郷のことが思いだされる。今ひとり故郷を遠く離れたこの地にあつて、今年もまた暮れようとしている。降りしきる風雪の中を一そこの篷舟（とまふね）に乗って桑名に向かつて美濃の国を下つてゆくのである。